

新約聖書の貨幣

田中 利光

はじめに

新約聖書には、紀元1世紀のユダヤ人たちの生活状況が庶民の視点から描かれている。紀元前後に、弱小国であったユダヤは列強国の覇権争いに否応なく巻き込まれ属州の憂き目にあっていた。そのため、ユダヤ人たちは、宗教、慣習、貨幣経済をはじめ日常生活の諸側面において変更を強いられることも少なくなかった。

ユダヤは紀元前64年までセレウコス朝シリアの支配下にあったが、同年にローマの執政官ポンペイウス（紀元前66-61年は執政官代理の身分）がセレウコス朝のアンティオコス13世アジアティコス（在位は紀元前69-64年）を退位させ、シリアをローマの属州（シリア属州）とした。セレウコス朝はフィリポス2世フィロロマイオスが名を挙げたものの、ポンペイウスによって廃位させられた。その後、ポンペイウスは紀元前63年にエルサレムに攻め入った。

そののち、ローマの権力下でユダヤの支配権を確立していったのはヘロデである（ユダヤの「王」としての在位は紀元前37-4年で、彼は「ヘロデ大王」と呼ばれていた）。しかし、彼は猜疑心が強かったことで知られ、身内の者でさえも処刑を含む粛清の対象とした。ヘロデの死後、ユダヤ各地で反乱が勃発した。さらに、ヘロデの息子たちが任された領地の統治も困難を極めた。その結果、紀元6年にユダヤとサマリアはローマの属州となった（ユダヤ属州）。

そのような状況下にあって、紀元1世紀のユダヤでは、ギリシア貨幣、ユダヤ貨幣、ローマ貨幣の三つの出処の異なる貨幣が流通していた。新約聖書にもそれらの貨幣が登場する。それらは種類の特定が比較的容易なものもあれば、種類を特定するのが困難な貨幣もある。そこで本稿では、特定が容易な貨幣の特徴と、また特定が困難な貨幣については、可能性のある種類をめぐる議論について考察する。なお、聖書からの引用は新共同訳聖書を用いる。

1. 神殿献納用の貨幣とツロ・シェケル

(1) 神殿税の由来

新約聖書の福音書には、エルサレム神殿への神殿税に関して次のような言及がある。

一行がカファルナウムに来たとき、神殿税を集める者たちがペトロのところに来て、「あなたたちの先生は神殿税を納めないのか」と言った。ペトロは、「納めます」と言っ

た。そして家に入ると、イエスの方から言い出された。「シモン、あなたはどうか。地上の王は、税や貢ぎ物を誰から取り立てるのか。自分の子供たちからか、それともほかの人々からか。」ペトロが「ほかの人々からです」と答えると、イエスは言われた。「では、子供たちは納めなくてよいわけだ。しかし、彼らをつまずかせないようにしよう。湖に行って釣りをしなさい。最初に釣れた魚を取って口を開けると、銀貨が一枚見つかるはずだ。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」

(マタイによる福音書 17 章 24-27 節)

新共同訳聖書の当該箇所では「銀貨」と訳している原文のギリシア語の単語は ΣΤΑΤΗΡ (スタテル) で、新改訳聖書では「スタテル銀貨」と訳されている。原文には「銀貨」を意味する ΑΡΓΥΡΙΑ (アルグリア) の表記はない。スタテルは元来ギリシア世界の一部で重量単位として用いられていたが、アイギナ島 (Aegina) で銀貨が鑄造されるようになると、その主要な貨幣がスタテルと呼ばれるようになり、その後、同じ名称がコリント (Corinth) でも用いられるようになった (Jones 1986:217)。1 スタテルは同じギリシアの貨幣単位であるドラクメの 4 ドラクメに相当し、ユダヤの貨幣単位であるシェケルの 1 シェケルに相当する。イエスは、スタテル貨を「わたしとあなたの分として納めなさい」とペトロに言っていることから、定められた一人分の神殿税は 2 ドラクメ (半シェケル) であったことがうかがえる。

そもそも、のちの神殿税の原型である「献納物」の納入は、出エジプト記 30 章 11 節から 16 節に由来するイスラエル人に課せられた義務であり、そこには次のように記されている。

主はモーセに仰せになった。あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災いがふりかからぬためである。登録が済んだ者はすべて、聖所のシェケルで銀半シェケルを主への献納物として支払う。一シェケルは二十ゲラに当たる。登録を済ませた二十歳以上の男子は、主への献納物としてこれを支払う。あなたたちの命を贖うために主への献納物として支払う銀は半シェケルである。豊かな者がそれ以上支払うことも、貧しい者がそれ以下支払うことも禁じる。あなたがイスラエルの人々から集めた命の代償金は臨在の幕屋のために用いる。それは、イスラエルの人々が主の御前で覚えられるために、あなたたちの命を贖うためである。

(出エジプト記 30 章 11-16 節)

このように、献納物はモーセが率いる出エジプトの途上で人口調査を行った際に、貧富の別なく 20 歳以上のすべての民に半シェケルを徴収したのが始まりである。のちに、ヨアシュ王（在位は紀元前 835-796 年）がエルサレム神殿を修繕した際に献金が課せられたが、一人当たりの額は定められなかった（列王記上 12 章参照）。その後、ネヘミヤの時代（第二神殿時代の初め）には、民は一人当たり 3 分の 1 シェケルを拠出する義務を負った（ネヘミヤ記 10 章 33-34 節参照）。

元来、シェケルは古代オリエントにおいて最もよく用いられた重量単位であった。紀元前 2000 年紀のバビロニアの重量単位では 1 シェケルは 8.4 グラムで、半シェケルはその半分の 4.2 グラムであった（Hendin 2007:77）。旧約聖書をみると「商人のシェケル」（創世記 23 章 16 節）（約 11.4 グラム）、「聖所のシェケル」（出エジプト記 30 章 13 節）（約 10 グラム）、「王のシェケル」（2 サムエル記 14 章 26 節）（約 13 グラム）の、異なる 3 通りのシェケルの基準があった。第一神殿（ソロモンの神殿）時代のシェケルの重量はおおよそバビロニアの重量単位にそっていた。

紀元前 4 世紀にはシドン（今日のレバノンのサイダ）の 2 シェケル銀貨や、ツロ（今日のレバノンのティルス）のスタテル銀貨が、シリア・パレスチナに流通していた。プトレマイオス 2 世（在位は紀元前 285-246 年）がテトラドラクメ（「4 ドラクメ」の意）の重量をアッティカの標準（17.46 グラム）からフェニキアの標準（14.30 グラム）に減らしてからは、それがのちにツロの貨幣重量に反映された。

（2） ツロ・シェケル

ツロには紀元前 2 世紀にセレウコス朝の重要な造幣所があった。紀元前 126 年にセレウコス朝の支配から解放され自治都市になった後も、銀貨のテトラドラクメ（4 ドラクメ）とディドラクメ（2 ドラクメ）が鑄造された。しかし、セレウコス朝の時代の貨幣に描かれていたような王の肖像はもはや描かれず、代わりに表面にはツロの守護神であるメルカルト神（ギリシア神話のヘラクレスと同一視されていた）が描かれた。裏面の周縁には「聖なる不可侵のツロ」の文字がギリシア語で刻字され、中央には引き続き鷹が描かれた。これらの銀貨には紀元前 126/125 年を第 1 年として、順次ギリシア文字を数字として用いた鑄造年号が刻字された（表 1 参照）。

これらはユダヤでも流通していたためツロのシェケルと呼ばれていた（以下「ツロ・シェケル」と表記する）。テトラドラクメは 1 シェケルに相当し、ディドラクメは半シェケルに相当した。半シェケルのほうは専らエルサレム神殿に納める神殿税の貨幣として用いられた。半シェケルの貢納がいつの時代に公的な管理のもと年税になったのかは明らかではないが、ハスモン朝の時代ではないかと考えられている（Meshorer 2001:74）。

(3) ツロ・シェケルの二つのグループ

ツロ・シェケルは、鑄造年代の違いによって「前期」と「後期」の二つのグループに分けられる。前期のものは紀元前 126/125 年から紀元前 20/19 年までツロの造幣所で鑄造されたもので、精巧な技術が施されている。貨幣の表面にはツロの守護神であったメルカルトが描かれ、裏面には鷲と周縁にはギリシア語で「聖なる不可侵のツロ」の文字が刻まれている（図 1 参照）。後期のものは、紀元前 19/18 年にヘロデ大王がエルサレムに新しい神殿（「ヘロデの神殿」あるいは「第三神殿」とも呼ばれている）を築造させたのに伴い、ヘロデ大王が造幣所をツロからエルサレムに移して、エルサレムの造幣所で鑄造したものである（図 2 参照）。

後期の貨幣も前期の貨幣と同様に表面にはメルカルト神が描かれ、裏面には鷹と「聖なる不可侵のツロ」の文字が周縁に刻字されているが、後期のものは前期のものに比べると造りが粗い。さらに、後期のものには前期のものには見られないギリシア文字の KAP（カッパ・アルファ・ロー）あるいは KP（カッパ・ロー）のモノグラム（組み合わせ文字）が、すべてのツロ・シェケルと半シェケル（図 3 参照）に刻字されている。KAP のモノグラムは紀元前 19/18 年から用いられるようになり、数年後には KP に変わった。その後、紀元 65/66 年に鑄造された最後のツロ・シェケルまで、例外なく、すべてのツロ・シェケルと半シェケルに KP のモノグラムが刻字された。

後期シェケルのモノグラムの意味は未だ明らかになっていないが、KP のモノグラムについて、メショラーは「ローマの力（または権威）」を意味するギリシア語の ΚΡΑΤΟΣ ΠΩΜΑΙΟΝ（クラトス・ローマイオン）ではないかとしている（Meshorer 1982 ②: 9）。

エルサレムでのツロ・シェケル及び半シェケルの鑄造は紀元 65/66 年のユダヤ戦争（第一次ユダヤ戦争）の勃発によって停止された。神殿税の献納に用いる貨幣に異教の神であるメルカルトの図柄や、エルサレムで鑄造された貨幣に施されているローマの権威や力を表していると思われる KAP あるいは KP の刻字を、なぜユダヤ人たちが容認できたのかについては確かなことは分かっていないが、タルムードのケリーム篇 12 章 6 節にある「大きいものは穢れうるが、小さいものは浄いままである」等を引き合いに出した説明が試みられている。そこでいう「大きいもの」とは比較的大きなシェケルである 1 シェケルを指し、「小さいもの」とは比較的小さな半シェケルを指すとの見方である。つまり、半シェケル銀貨は神殿に献納するものとしてユダヤ法の規定における穢れに抵触しないとみなされていたのではないかとするものである。メショラーは、エルサレム造幣所はツロ鑄造のシェケルのデザインに対する軽蔑の表現として、エルサレムで鑄造されたシェケルの外観を粗野に鑄造することで表現したとしている（Meshorer 2001:77）

2. イスカリオテ・ユダの銀貨

新約聖書中で、イスカリオテ・ユダがイエス・キリストを裏切った報酬として手に入れた銀貨の話はあまりにも有名である。その経緯は次のとおりである。

そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの 男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。 (マタイによる福音書 26 章 14-15 節)

イスカリオテ・ユダの裏切り行為によって祭司長たちと交わされたキリスト引き渡しの報酬は、ギリシア語の原文では銀貨 (ΑΡΓΥΡΙΑ アルグリア = 「銀貨」の意) とあるが、その種類 (金種) について聖書は言及していない。ヘンディンは、「ユダに支払われた銀貨 30 枚は、当時ユダヤで最も一般的に使用され、受け入れられていた大型銀貨であるツロ・シェケルであったと考えるのが論理的である」としている (Hendin 2021:443)。

聖書には、イスカリオテ・ユダと祭司長たちとの取引の顛末について次のように記されている。

そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言った。しかし彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。祭司長たちは銀貨を拾い上げて、「これは血の代価だから、神殿の収入にするわけにはいかない」といい、相談のうえ、その金で「陶器職人の畑」を買い、外国人の墓地にすることにした。このため、この畑は今日まで「血の畑」と言われている。 (マタイによる福音書 27 章 3-8 節)

イスカリオテ・ユダの裏切りの顛末について、マタイによる福音書 27 章とは異なる、もう一つの説明が使徒言行録にみられ、そこには次のように記されている。

ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で「アケルダマ」、

つまり、「血の土地」と呼ばれるようになりました。 (使徒言行録1章17-19節)

イスカリオテ・ユダの最期について、マタイによる福音書と使徒言行録の説明を調和させるには若干の組み合わせによる解釈が必要であろう。つまり両者の記述から、ユダは縄で自ら首をくくり、真逆さまに落下して使徒言行録の記述するような悲惨な結果になったとする捉え方である。祭司長たちはユダが投げ捨てた銀貨 30 枚で土地を買ったとあるが、イスカリオテ・ユダが受け取った銀貨が仮に「ツロ・シェケル」だとすれば、1 ツロ・シェケルはローマ銀貨の 4 デナリオンの価値に相当する。1 デナリオンは当時の労働者の 1 日の賃金に相当するため¹⁾、つまり、イスカリオテ・ユダが受け取った銀貨 30 枚は、120 日分の賃金に相当する価値があった。

3. 皇帝への税金

聖書には、ユダヤの民がローマに納める税金について、次のようなくだりがある。

さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていませんでしょうか。納めるべきでしょうか。納めてはならないのでしょうか。」イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」彼らはそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

(マルコによる福音書 12 章 13-17 節)

そこに記されている「デナリオン銀貨」は、原文では ΔΗΝΑΡΙΟΝ (デナリオン) となっており「銀貨」を意味する ΑΡΓΥΡΙΑ (アルグリア) の表記はない。そもそも、デナリオンはローマ帝国において紀元前 211 年から鑄造されてきた少額の銀貨であり、1 デナリオンをユダヤ貨幣に換算すると 4 分の 1 シェケルに相当する。

人々の質問に対しイエスが回答したデナリオンで考えられうる銀貨としては、アウグストゥス (在位は紀元前 27 年から紀元 14 年) (図 4 参照)、あるいはティベリウス (在位

は紀元 14 年から 37 年) (図 5 参照) の貨幣が一般的に考えられてきた^{2b)} とくに、ファリサイ派の信者らとイエスの会話のやり取りが行われた当時のローマ皇帝はティベリウスであったことから、マルコによる福音書の当該箇所では差し出されたデナリオン銀貨にはティベリウスの肖像があったとする見解が有力視されているが、アウグストゥスの可能性も考えられるとされている。

当該貨幣がティベリウスであった可能性を支持するもう一つの理由として、PONTIF MAXIM (ポンティフ・マキシム) (「最も偉大な教皇」の意) と銘打ったデナリオン銀貨は、ティベリウス帝のもとで製造されたデナリオン銀貨が 98% を占め、ティベリウスが自らの治世の最初の 2 年間に使用したものであり、彼は在位中にその一つのタイプのみを使用したことがあげられている (Hendin 2021:447)。

しかしながら、デナリオンを支持することへの難点も指摘されている。その一つについてヘンディンは、ローマ時代のガリラヤの貨幣研究の第一人者であるシヨン (Syon, D.) の見解を紹介しながら、ティベリウスのデナリオン銀貨はイスラエル古物局 (Israel Antiquities Authority) の保管庫でさえ僅か 4 枚あるのみで (2021 年現在)、しかもそのうちの 1 枚はフェニキア出土のものであり、残りの 3 枚は出所不明であり、その出土数はきわめて少なく、したがってキリストが見たのは別の貨幣であった可能性があるとしている。それでは、アウグストゥスのデナリオン銀貨に指向するののかといえば、アウグストゥスが統治した年代 (紀元前 27- 紀元 14 年) からみてその可能性は低いとみられている。それらの事情を反映して、ヘンディンは、マルコによる福音書 12 章 13-17 節にあげられている貨幣は銀貨ではなく、アウグストゥスかティベリウスの肖像が描かれた青銅貨ではないかとするシヨンの見解も示している。以上のような状況から、ヘンディンは、皇帝への税金の貨幣については、確固たる見解は存在しないとしている。(Hendin 2021:446-448)。

4. やもめの献金

新約聖書には、ひとりの寡婦の献金を傍で見ていたイエス・キリストの発言が、次のように記されている。

イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から

自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。

(マルコによる福音書 12 章 41-44 節)

イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

(ルカによる福音書 21 章 1-4 節)

上記の二人の人物が書き記した、同一の件についてのイエス・キリストの発言は、いずれも金銭そのものに焦点が当てられているのではなく、慈善行為の動機のほうに焦点が当てられている。つまり、ひとりの寡婦が全財産を献金したその信仰心に対する称賛なのである。

レプトンはギリシア語であり、ギリシア貨幣の最小通貨単位である。レプトンの価値は、ユダヤ貨幣の最小貨幣単位であるプルタと同等であり、先のマルコによる福音書とルカによる福音書では、ギリシア語で表記している。この寡婦の献金の貨幣は、おそらくハスモン朝のアレクサンドロス・ヤンナイオスの存命中（紀元前 76 年死没）に鑄造されたものか、あるいは彼の後継者たちの時代に鑄造されたものとみられている（図 6 参照）。

アレクサンドロス・ヤンナイオスの貨幣の図柄には星が描かれているものがあるが、ヤンナイオス以前のユダヤで鑄造された貨幣（及びユダヤで流通した貨幣）には星が描かれているものはなかった。星は古代から幸運と運命を象徴するものとして、占星術的な意味合いをもって捉えられていたが、ヤンナイオスの貨幣にみられる星の図柄は、星（つまり占星術）に対するユダヤ人の関心を示すものではないかという指摘がある（Meshorer 1982 ①:60）。このような異教的な概念の取り込みはタルムードにもみられ、例えば、アヴォダー・ザラー篇のなかには「星と星座よ、私のために慈悲をとりなせ」（アヴォダー・ザラー篇 7a）の文言がみられる（Epstein 1988）。

5. ローマの最小額貨幣

新約聖書には、ローマの最小額貨幣であるクェドランス（新改訳聖書ではコドラントと訳されている）について、次のような言及がある。

だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのを

そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。はっきりしておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。

(マタイによる福音書 5 章 23-26 節)

イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわちクアドランスを入れた。イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきりしておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人のなかで、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

(マルコによる福音書 12 章 41 節 -44 節)

ローマ貨幣であるクアドランスは、ラテン語で QUADRANS と表記され、新約聖書ではギリシア語の ΚΟΔΡΑΝΤΗΣ (コドランテース) として表記されている。クアドランスは、同じローマ貨幣で、聖書ではアサリオンと記されている銅貨のアス (AS) の 4 分の 1 の価値に相当し、ユダヤ貨幣であるプルタ (新約聖書ではレプトン呼ばれている) の 2 分の 1 の額面であった (図 7 参照)。

おわりに

新約聖書の舞台である紀元 1 世紀のユダヤにおける貨幣経済の特徴は、ギリシア貨幣とローマ貨幣の流通に加え、ハスモン朝時代のユダヤ貨幣も使用され、まさに「るつぼ」的な貨幣経済の様相を呈していた。それは、この地域が周辺の強国にとっては他国に進出する際の中継地点に位置していたことや、宗教的には、一神教を固守していたユダヤ人たちの勢力を削いで、支配下におさめることが戦略的に重要であったからに他ならない。

本稿で取り上げた数種の貨幣のなかで、神殿税用の貨幣については、ツロの半シェケル貨であるとの認識が一般的である。しかしながら細部についてみていくと、ヘロデ大王がエルサレム神殿の改築 (ヘロデの神殿) を機に導入した後期の貨幣へのギリシア語の KAP あるいは KP のアルファベットの刻字に関して、未だその意味は解明されていない。さらに、貨幣の表面に描かれているメルカルト神をユダヤ人がなぜ容認できたかについても確かなことはわかっていない。いずれにしても、KAP あるいは KP やメルカルト神は、

ローマ帝国の威信を象徴するものと考えられており、ユダヤ人にとっては屈辱感を伴うものであったと推察されるが、もはや、それに従うしか途はなかったと思われる。

イスカリオテ・ユダの銀貨については、その種類がツロ・シェケルであると確認されたわけではないが、紀元1世のユダヤで最も一般的な銀貨はツロ・シェケルであったことから、この銀貨とみてほぼ間違いないではないと考えられている。後期のツロ・シェケルについては、ツロの半シェケル同様にメルカルト神が描かれ、後期の鑄造には KAP あるいは KP のアルファベットが刻字されている。

ローマへの税金であるデナリオンについては、イエス・キリストの公生涯当時のティベリウス帝の貨幣であったのか、それとも前代のアウグストゥス帝の貨幣であったのか解明されてはいない。

やもめの献金については、ハスモン朝のアレクサンドロス・ヤンナイオスか彼の後継者たちのレプトン（プルタ）貨であったと思われるが、貨幣を発行した人物を特定するのは困難である。

新約聖書の貨幣に関して、それら未だ解明できていない課題があるものの、いずれの場合も、想定され得る以外の貨幣や人物への変更の可能性は低いといえる。

註

- 1) タルムードのアヴォダー・ザラー篇の 62a に、紀元 1-2 世紀の労働者の 1 日の賃金として、デナリが記されている。
- 2) ローマに納める税金の金種について、19 世紀にマデン (Madden, Frederic W.) やロジャーズ (Rogers, Edgar) らが、ローマへの納税の貨幣の金種について、ティベリウスのデナリウスの可能性が最も高いとする見解を示したことにより (Madden 1864, 1881, Rogers 1914 参照)、それが今日に至るまで一般の認識となっているとヘンディンは指摘する (Hendin 2021:447 参照)。

引用・参考文献

欧文

- Epstein, I. (ed.) (1988) *Hebrew-English Edition of the Babylonian Talmud, Avodah Zarah.*, Soncino Press.
- Hendin, David (2007) *Ancient Scale Weights and Pre-Coinage Currency of the Near East.*, Amphora.
- Hendin, David (2021, 6th ed.) *Guide to Biblical Coins.*, American Numismatic Society.
- Hoover, Oliver D. (2010) *Handbook of Coins of the Southern Levant: Phoenicia, Southern Koile Syria (Including Judaea), and Arabia.*, Classical Numismatic Group.
- Jones, John M. (1986) *A Dictionary of Ancient Greek Coins.*, Spink & Son.
- Madden, Frederic W. (1864, reprint 1967) *History of Jewish Coinage and of Money in the Old and New Testament.*, KTAV Publishing House.
- Madden, Frederic W. (1881, reprint 1976) *Coins of the Jews.*, Olms Verlag.
- Mattingly, Harold (1923) *Coins of the Roman Empire in the British Museum, vol. 1, Augustus to*

- Vitellius., Trustees of the British Museum.
- Meshorer, Ya'akov (1982 ①) *Ancient Jewish Coinage, Vol. I: Persian Period through Hasmonaeans.*, Amphora Books.
- Meshorer, Ya'akov (1982 ②) *Ancient Jewish Coinage, Vol. II: Herod the Great through Bar Cochba.*, Amphora Books.
- Meshorer, Ya'akov (2001) *A Treasury of Jewish Coins.*, Yad Ben-Zvi Press & Amphora Book.
- Nestle-Aland (2012, 28th revised ed.) *Novum Testamentum Graece.*, Deutsche Bibelgesellschaft.
- Rogers, Edgar (1914) *A Handy Guide to Jewish Coins.*, Spink & Son.
- Sear, David R. (2000) *Roman Coins and Their Values, Vol.1, The Republic and The Twelve Caesars 280 BC-AD 96.*, Spink & Son.
- Sperber, Daniel (1974) *Roman Palestine 200-400 Money and Prices.*, Bar-Ilan University.
- Sutherland, C.H.V. & Carson, R.A.G. (eds.) (1984) *The Roman Imperial Coinage, Vol. 1, From 31 BC to AD 69.*, Spink & Son.

和文

- 共同訳聖書実行委員会訳 (1987) 『聖書 新共同訳』 日本聖書協会。
- ゲルツァー, マティアス / 長谷川博隆訳 (2013) 『ローマ政治家伝Ⅱ ポンペイウス』 名古屋大学出版会。
- 新日本聖書刊行会訳 (2017) 『聖書 新改訳 2017』 いのちのことば社。
- 田中利光 (2025) 「第二神殿時代のユダヤ貨幣」『敬和学園大学研究紀要』 第 34 号、19-35 頁、敬和学園大学。

表 1 ギリシア語アルファベットの数字システム

丸カッコ () 内は音価 筆者作成

A (a)	1	I (i)	10	P (r)	100
B (b)	2	K (k)	20	Σ (s)	200
Γ (g)	3	Λ (l)	30	T (t)	300
Δ (d)	4	M (m)	40	Υ (y)	400
E (e)	5	N (n)	50	Φ (ph)	500
F (ts)	6	Ξ (ks)	60	X (kh)	600
Z (z)	7	Ο (o)	70	Ψ (ps)	700
H (ê)	8	Π (p)	80	Ω (o)	800
Θ (th)	9	Ϟ (q)	90	Ϡ (ss)	900

図1 ツロ・シェケル (前期)

筆者所有



銀貨：4ドラクメ（1シェケル），29.0mm，14.34 g
造幣：紀元前 48/47 年，ツロ

表面にはツロの守護神であるメルカルト神の頭部（右向き）が描かれ、裏面には鷲が描かれている。裏面を時計回りに取り巻く形で、ギリシア語で ΤΥΡΟΥ ΙΕΡΑΣ ΚΑΙ ΑΣΥΛΟΥ（「聖なる不可侵のツロ」の意）の文字が刻字されている。鷲の腹部には、ギリシア語アルファベットを用いた数字（表1参照）の ΟΘ（79）が刻字されている。ツロがセレウコス朝から独立を取り戻してから数えて第79年目は、すなわち西暦の紀元前48/47年にあたる。

なお、図1の貨幣はスラブ型ケースに保存されているため、四隅に貨幣を固定するための爪が出ている。

図2 ツロ・シェケル (後期)

筆者所有



銀貨：4ドラクメ（1シェケル），25.0mm, 13.05 g
造幣：紀元 10/11 年，エルサレム

後期のツロ・シェケルの裏面には、前期のツロ・シェケルと同じ図柄があり、また同じ内容のギリシア文字が刻字されているが、裏面にギリシア文字で **KP** の刻字があることにより本貨幣が後期の鑄造であることが分かる。**ΠΑΡ** のギリシア文字による数字はツロが独立してから 136 年目であることを意味し、それは西暦の紀元 10/11 年にあたる。図2のシェケルは後期の鑄造にしては比較的に精巧な仕上がりである。

図3 ツロ・半シェケル（後期）
神殿税用貨幣

筆者所有



銀貨：2ドラクメ（半シェケル），20.5mm，6.21 g
造幣：紀元 45/46 年，エルサレム

表面には、メルカルト神の戴冠した頭部（右向き）が描かれている。裏面には、鷲（左向き）が描かれ、背景に椰子の葉が描かれている。

裏面の左側にはギリシア文字で POA の刻字があり、ギリシア語アルファベットの数字システム（表 1 参照）から、P は 100、O は 70、A は 1 となる。そこから、鑄造年は第 171 年となる。この後期のツロ・半シェケルは（後期のツロ・シェケルの場合もそうであるが）エルサレムで鑄造されたにもかかわらず、ツロの独立年から数えた鑄造年の刻字を保持しており、これを西暦に換算すると紀元 45/46 年となる。

鷲の背後には、ギリシア文字で KP（カッパ・ロー）の刻字がある。裏面の右周縁部にはギリシア語で、ΤΥΡΟΥ ΙΕΡΑΣ（「聖なるツロ」）の刻字があり、左周縁部には ΚΑΙ ΑΣΥΛΟΥ（「かつ不可侵の」）の刻字がある。それらをつなげて読むと「聖なる不可侵のツロ」と読める。

後期のツロ・シェケル及びツロ・半シェケルは前期のものに比べ、一般的に粗雑にできているが、図 3 の半シェケル（後期）はかなり精巧な仕上がりである。

図4 アウグストゥスの肖像がある貨幣

筆者所有



銀貨：デナリウス，20.0mm, 3.83 g
造幣：紀元前 2- 紀元 4 年，ルグドヌム

表面には、ローマ皇帝アウグストゥスの戴冠した頭部（右向き）が描かれ、周縁に下部から反時計回りにラテン語で CAESAR AVGVSTVS DIVI F PATER PATRIAE（「カエサル・アウグストゥス、神の子、国家の父」の意）の文字が刻字されている。

裏面にはアウグストゥスの孫であり養嗣子であるガイウス・カエサルとルキウス・カエサルが正面を向き、それぞれ槍と丸盾を挟んで立ち、その上にリトゥス（儀式用の杖）とシンブルム（長い柄のついた小型容器）が描かれている。

図5 ティベリウスの肖像がある貨幣

筆者所有



銀貨：デナリウス，18.0mm, 3.70 g
造幣：紀元 14-37 年，ローマ

表面にはローマ皇帝ティベリウスの頭部（右向き）が描かれている。周縁には、ラテン語で TI CAESAR DIVI AVG F AVGSTVS と刻字されている。それは、TI：ティベリウス（Tiberius）、CAESAR：カエサル、DIVI AVG F: 神格化されたアウグストゥスの息子（Divi Augusti Filius）、AVGVSTVS：アウグストゥス、つまり「神格化されたアウグストゥスの息子、ティベリウス・カエサル・アウグストゥス」という意味になる。

裏面には女性の座像が描かれ、おそらくティベリウスの母リウィアであると考えられている。周縁には、ラテン語で PONTIF MAXIM（「最も偉大な教皇」）と刻字されている。

図6 やもめの献金の貨幣

筆者所有



青銅貨：プルタ ,13.1mm, 0.92 g
造幣：紀元前 103-37 年, エルサレム

表面の中央には錨が描かれ、それを輪が取り巻いている。裏面には中央の星から放出される光が描かれている。

アレクサンドロス・ヤンナイオスの治世（紀元前 103-76 年）から、彼の後継者であるサロメ・アレクサンドラ（紀元前 76-67 年）、ヨハネ・ヒルカノス 2 世（紀元前 67、63-40 年）、アリストプロス 2 世（紀元前 67-63 年）と、マティア・アンティゴノス（紀元前 40-37 年）の、いずれかの時代に鑄造されたプルタ貨であると考えられているが、それらの期間に、アレクサンドロス・ヤンナイオスの治世に鑄造されたひとつの種類のプルタ貨を模して無数の種類の粗雑なプルタ貨が鑄造されたため、「やもめの献金」の種類を特定するのは困難である。ここでは、それらいずれかの時代に鑄造された比較的図柄が鮮明に残っているプルタ貨を例示している。

図7 ローマ帝国の最小額貨幣

筆者所有



青銅貨：クアドランス, 17.0mm, 2.67 g
造幣：紀元前5年, ローマ

表面には中央に祭壇があり、周縁にラテン語で、鑄造職人のメッサラ (MESSALLA) とガルス (GALVS) の名前が刻字され、III VIR (共和政再建のための三人委員会) の略号が刻字されている。

裏面にはシセンナ (SISENNA) とアプロニウス (APRONIVS) の名が刻字されている。裏面中央の S.C. は、SENATVS CONSVLTO (セナトゥス・コンスルト) の略号で、SENATVS は「元老院」を意味し、CONSVLTO は「執政官」を意味する。アウグストゥス帝からガイウス帝の時代に鑄造された青銅貨には S.C. の略号が刻字されている (金貨と銀貨にはない)。S.C. の刻字は、元老院の同意のもと執政官の決定により発行されたものであることを示している。

図示しているクアドランス貨はアウグストゥス帝時代のものである。